

九州大学 大学文書館ニュース

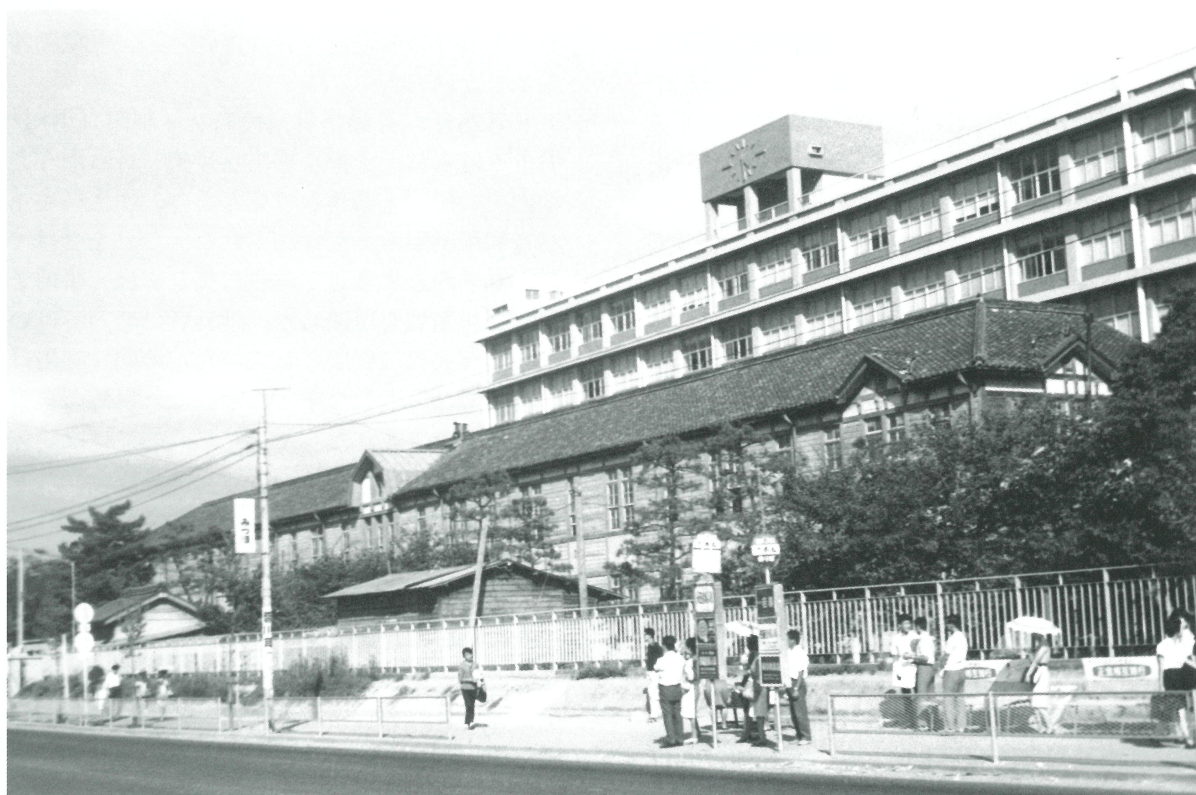
第44号

2021. 3. 31

目 次

コロナ禍のなかの大学文書館…………… 2
九州大学医学歴史館の建設とその背景…………… 4

九州大学大学文書館委員会名簿…………… 7
九州大学大学文書館名簿…………… 7
大学文書館日誌抄録…………… 8



「教養部旧本館と新本館」 (1967年)

六本松にあった教養部は、旧制福岡高等学校の校舎をそのまま使用していたが、1955年の分校統合により学生数が増えたため、校舎の建て替えを進めていった。新本館の建設工事は3期に分けて行われ、第1期工事が1966年3月、第2期工事が同年11月、第3期工事が1968年3月にそれぞれ竣工した。旧制福高以来の旧本館は第3期工事竣工前の1967年に取り壊された。写真は新旧本館が併存していた束の間の姿を収めたものである。

コロナ禍のなかの大学文書館

藤岡健太郎

2019年終わりに中国で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は瞬く間に世界中でパンデミックを引き起こし、多数の死者を出すのみならず、経済・社会・文化に深刻な影響を与えている。この原稿を書いている時点で発生確認から1年以上を経過し、ワクチン接種が一部の国で始まっているが、いまだ終息は見通せない状況にある。

日本でも2020年3月には学校の一斉休校が行われ、4月には緊急事態宣言が出されて、外出の自粛等を余儀なくされた。自粛期間中は学校やほとんどの公共施設は閉鎖され、いまだに元通りには戻っていないところも少なくない。

とりわけ大学は、他の学校よりも甚大な影響を受けた。九州大学の場合、1月末から注意喚起が行われはじめ、2月末にはイベント開催の是非を検討するよう指示が出された。これを受けて、当館折田教授の最終講義・退職祝賀会は中止となり、その他学内のイベントも次々に中止となっていた。卒業式は行われたものの、出席は各学部等の総代学生のみとなった。

4月になると、さらに状況は深刻化した。春学期の授業はすべてオンラインで実施され、実験・実習も実質的にはほとんど行えない状況となった。夏学期から例外的にごく一部の授業について対面での実施が認められ、秋学期からはさらに対面授業も増えたが、まだすべての授業が対面で行える状況ではない。他の学校がほぼすべて対面授業に移行していくなかで大学のみがオンライン授業を継続していることに対しては、学生等から多くの批判がなされている。もっともなことではあるが、学生の行動範囲が広いこと、高校以下とは異なり授業ごとに学生が教室を移動せねばならないことなどを考えれば、このような対応はやむを得ないところでもある。

授業のみならず、業務・研究についても緊急事態宣言下では在宅で実施せざるを得なくなった。九州大学大学文書館は4月7日に緊急事態宣言が出されたのを受けて、翌8日より臨時休館とし、スタッフは原則として在宅勤務となった。九州大学では独自の行動指針が設けられ、5段階のうちの段階4「制限（大）」とされた。段階5は「原

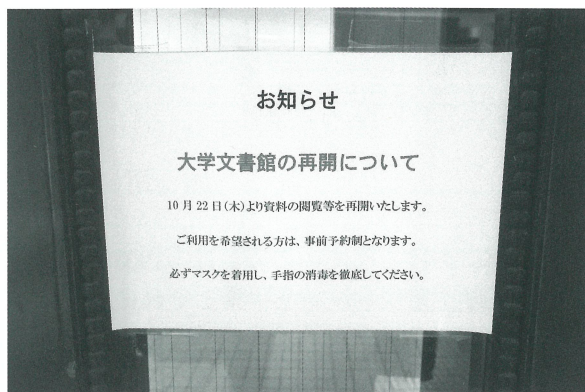
則停止」ですなわち大学閉鎖であり、その一步手前の状態だったわけである。資料原本を持ち帰るわけにはいかないので、在宅勤務中は資料整理等は行えず、業務内容はデータ入力や校正、『大学史料叢書』の索引作り等、在宅で可能なものに限られた。

緊急事態宣言は福岡県では5月14日に解除され、九州大学でも行動指針を段階3「制限（中）」に引き下げたが、学外者の不要不急の来学は自粛を要請、授業もオンラインを継続、他大学のアーカイブズのほとんどが再開していない、ということに鑑み、大学文書館も臨時休館を継続することとした。業務については、教員は週2日、その他のスタッフは原則週1日の出勤とし、在宅勤務を主とした。

6月25日、行動指針は段階2「制限（小）」に引き下げられ、十分な感染症対策を行ったうえで学内での研究・業務が可能となり、学生のキャンパス利用制限も一部緩和された。これを受けて29日より学内の教職員・学生に関しては、事前予約制で資料閲覧を再開した。学外者についてはいまだ入構が大幅に制限されていたため閲覧利用はこの段階では再開しなかったが、それ以外の業務での来館は受け入れた。ただし形式的には臨時休館を継続することとしている。一部再開を受けて、卒業論文で当館の資料を使用する学生の利用等があり、また福岡県立美術館より当館所蔵の絵画「上高地の夏」（吉田博画）の貸出依頼があって、これらに対応した。

その後、本学学生間での小規模なクラスター発生に伴い8月6日から行動指針が再び段階3「制限（中）」に引き上げられたが、この時点での対応の変更は行わなかった。附属図書館が時間を短縮しながらも開館を継続したことに鑑み、また当館では同時に閲覧利用できる人数を1人に制限しており感染リスクは低いと判断したためである。

9月1日に行動指針は段階2「制限（小）」に、さらに10月20日からは段階1.5「一部制限」に引き下げられた。これにより学外者の入構が「できるだけ短時間」という制限付きながらも可能になったため、10月22日より再開し、学外者の閲覧利用も可とすることとした。ただし事前予約制、



大学文書館の再開についての掲示

同時に利用できる人数は1人のみという制限付きである。再開後、数件の学外者の閲覧が行われた。

11月以降、全国的に感染拡大の第3波が起き、医療崩壊の危機が叫ばれているが、福岡県では12月はじめごろまでは、首都圏ほどの感染者の急増はみられていなかった。しかしその後年末にかけて感染者が急増し、2021年に入るとさらに爆発的な増加となり、学内でも感染者が増加していった。九州大学の行動指針は1月13日に段階2「制限(小)」に引き上げられ、翌日には福岡県も緊急事態宣言の対象に加えられた。これを受けて1月18日より学外者の閲覧利用については不可とした。

本稿執筆時点の1月までの状況は以上のとおりであるが、業務・研究については滞ってしまったことが多く、さまざまな面に大きな影響が出ている。

特に大きな影響を受けたのは資料整理である。とりわけ前年度後半に寄贈を受けていた資料の整理は着手が大幅に遅れた。例年学生アルバイトを雇用してこうした作業を行っていたのだが、授業が対面で行えない状況で学生を大学に來させるわけにもいかず、スタッフも出勤できない状況が続いたため、しばらくは保留しておくしかなかった。ようやく制限緩和を受けて11月から学生アルバイトを雇用し、遅ればせながら資料整理にとり

かかることとなった。コロナ禍で学生はアルバイトもままならず、対面授業も限られていて他人と接する機会も少ないなか、少しは学生生活にも貢献できているのではないかと思う。資料整理は順調に進捗し、遅れを取り戻してはいるが、伊都での作業であるため、監督をする教員の負担が重くなっているところが問題ではある。

また、研究活動にも大きな影響を与えた。特に海外での調査はまったくできない状況になった。筆者が研究代表者になっている科研費の調査で2020年3月に台湾に出張する予定であったが、直前で取りやめとなった。また、新たに獲得した折田名誉教授を研究代表者とする医療アーカイブズに関する科研費で、欧米諸国の視察が予定されていたが、これも2020年度内の実施は不可能になった。国内に関しても、感染拡大地域への出張については慎重な判断が求められており、東京への出張調査等は難しい状況にある(余談だが、筆者は台湾出張の代わりとして2020年3月に東京に出張したのだが、出張を決めた後にメインの調査先と考えていた国立公文書館が休館となり、代替りの調査先とした国立国会図書館も上京翌日から休館してしまい、たいした成果も得られないまま2泊3日の予定を1泊で切り上げて帰福せざるを得なかった)。

他大学のアーカイブズも、4月の緊急事態宣言と前後して休館の措置がとられ、その後再開にあたっては事前予約制や人数制限などを行っている。いずれも大学の方針に従った措置であるが、最も感染状況が厳しい東京都内では、国立公文書館等に指定されている各大学アーカイブズは3月から4月にかけて閲覧利用の停止を始めて以来、いまだに再開できていないようである。

以上、コロナ禍のなかで九州大学大学文書館がどのような状況に置かれ、どのような対応をしてきたか、その概要を述べてみた。こうしたことは2度と起きてほしくないところではあるが、記録として残しておく意味はあるだろうと思い、記した次第である。

九州大学医学歴史館の建設とその背景

赤 司 友 徳

九州大学医学歴史館（以下、医学歴史館）は2015年4月に開館し、すでに6年が経過した。筆者は同館には開館準備から関わりながら、これまで建設の経緯等についてまとめることを怠っていた。その反省の上に立ち、本稿において医学歴史館の建設に至った歴史的経緯について整理し、記録しておきたい。

医学歴史館設立の淵源はどこに求められるか。九州大学医学部において教員や卒業生らの有志は1960年代に医学部内の貴重な歴史資料（以下、史料とも）を集め、歴史的建造物や史蹟の保存を行う活動を開始した。その後、紆余曲折を経て半世紀もの長い時間がかかったものの、医学歴史館の設立はこの1960年代以降の医学部および医学部同窓会による史料・史蹟保存運動に位置づけられよう。以下、医学歴史館所蔵の資料から追える範囲で、1960年代から医学歴史館建設までの経緯について述べたい。

1962年2月、九大附属図書館医学分館（現、医学図書館）内に資料展示室が設置された。展示内容については不明だが、医学部創立以来はじめて各教室が所有する歴史的な資料や物品が一堂に集められたという。1965年4月、資料展示室の公開からまもなくして解剖学の今井環教授が委員長となり、医学部史蹟保存委員会が組織された。そして1年後、①建造物の保存、②建造物の模型作成、③記念碑・記念像・銘板等の設置、④医学部の発展に著しい功労のあった人物や学部の重要な史実を記念し、建造物、道路等に冠名することなどが決定した¹。



医学部中央事務棟より正門を望む（1953年頃）

医学部における歴史への着目は、1958年から始まった医学部附属病院新築事業とそれともなう病院地区の再開発が背景にあった。医学部の発展をもたらす新築事業ではありながら、「それともなう起る古い建造物の破壊を軽卒に進めていく時は、悔を千載に残すおそれがある」²との憂慮もあった。各教室が独立した建物を構えるパビリオン型のキャンパスから、医学教育、臨床と研究を効率的に実施できる統合型のキャンパスへ脱皮するなかで、明治以来の古い建造物や松林は次々と姿を失っていった。また、古い建物の取り壊しとともに、史料も廃棄されていた。このような事態を憂慮した教員や卒業生らが運動を起こし、史蹟保存委員会の設置となったのである。しかしながら、史蹟保存委員会はあくまで歴史的建造物や景観の保存が主目的であって、歴史資料の収集・保存についてはこの時点では対象になっていなかった。

歴史資料の問題が浮上するのは1980年になってからである。この年、附属図書館医学分館の新築が決定し、資料展示室は移転せざるを得なくなった。そこで比較的広い空間であった「基礎研究A棟」1階ロビーに移転が決まる。その際、あらためて各教室に対し、所蔵史料の情報提供および展示への協力依頼がなされた³。医学部資料室と名づけられたこの場所でその後しばらくは、医学部の史料は安定して保管されていたが将来的な散逸を防ぐことはできなかった。医学部教授会において史料や展示室の管理運営の責任と役割が明確に定められなかったからと推測されるが、医学部資料室は次第に関係者の退職などとともに形骸化していったようである。そしていかなる経緯かは不明だが、一部の史料は提供元の教室が持ち帰るなど、徐々に展示室としての体裁を失っていった。

1997年、医学部の史料に大きな転機が訪れる。この年の10月、日本医史学会の総会および学術大会がはじめて九州の地に到来し、福岡市博物館では「近世の医学と福岡の医家」展があわせて開催された。これらに先立ち、同学会福岡地方会会員で九大医学部卒業生の有志や教員、順天堂大学の酒井シヅらが医学部内において史料および学術標

本の調査・整理を行った⁴。このようにして医学部および医学部同窓会の中に史料保存の気運が再び高まった。

さらに1998年に始まった医学部附属病院の新建築事業も重要である。1976年11月、取り壊しが予定されていた解剖学講堂は医学部同窓会員の寄付によって辛うじて難を逃れ、附近の敷地に移築された。それは新入生オリエンテーションの場としても活用された解剖学講堂は、卒業生にとって学生時代の思い出の建物の一つであったからである。また、建物の一角には医学部の淵源とされる養生館の提挙（督学）であった武谷祐之の石碑ものちに建てられ⁵、医学部の卒業生にとっては在学中を思い起こす特別な場所となっていた。このような記念・記憶の場が形成されたことは、先述の史蹟保存運動の成果と言えよう。ところが1998年5月、この周辺区画が新病院の建設地の一部にかかり、移設に関わった人びとも知らぬ間に建物が取り壊されてしまった。

次の重要な節目は、2003年の医学部創立百年である。百周年を迎えるにあたり、医学部や医学部同窓会では各種の記念事業が計画、実施された。医学部百年講堂の建設・寄付事業が主たる事業であったが、同窓会員にとって医学部百年史および写真集の刊行⁶は自らの歴史を振り返り、その意義をあらためて知らしめた。実は、この歴史文化事業は先述の史料や史跡に関する活動の延長にあった。同窓会の有志らによって行われた解剖学講堂の移設や90年代後半における史料調査といった活動は、母校の誇るべき歴史が相次いで失われたことへの落胆となった。しかしその落胆は史料保存を積極的に行うことがいかに重要であるかについての気づきにもなった⁷。このような背景から、医学部同窓会は史料・史蹟保存委員会を設置し⁸、大学に対して史料保存および展示するスペースの確保を求めた。そしてのちに博物館設置構想へと発展する⁹。

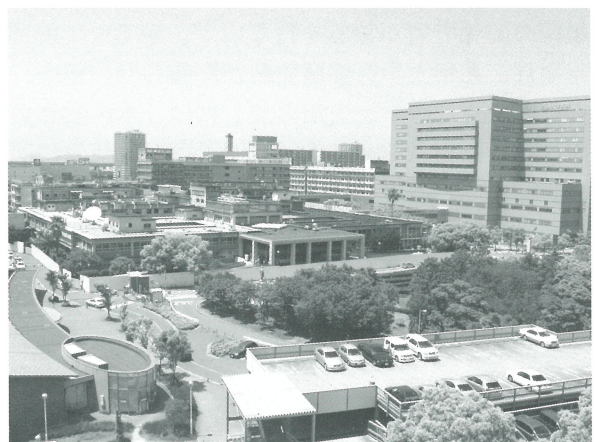
史料・史蹟保存委員会は、2006年12月の第7回委員会にて「現在各教室等に分散しているところの博物館収納・展示予定の史料の嚴重保管について各教室の史料リスト（上記1980年調査）を再確認して、嚴重保管を各教室責任者に通達」する旨を確認し、翌年3月に旧外来棟に医学教育博物館を設置する構想を発表した¹⁰。医学部および病院との協議も進められ、2008年1月の病院地区協議会において「医系教育博物館構想」が正式承認された。少々長いが、以下で博物館設置の趣旨を紹

介したい。

九州大学医学部は創立100周年を迎え、病院は新建築となりましたが、100年の歴史の貴重な史料・史蹟を保存する場所の計画がはっきりしないままに経過しています。独立法人化した新体制は現実には経営優先にならざるを得ず、史料・史蹟保存という地味な事業としては心ならずも、後回しにされることが憂慮されます。しかし理由は何であれ、史料・史蹟館を具体化することは創立100年の時期に居合わせた我々の次世代に対する重大な責任です。この見地から医学部同窓会史料・史蹟保存委員会は、現在使用中の病院外来建築の一部を史料・史蹟保存の場所にあてることが諸般の事情を勘案して最適であると考え、大学当局をはじめ、同窓会会員ならびに関係各位のご理解を得るために素案を作ってみました¹¹

この医系教育博物館は「学内ならびに市民のための教育」をする施設として、「史料・史蹟保存をその中に取り入れて具体化する」ことを設置の理念とし、「学外にも開かれた施設とすることによって、関連諸団体からの支援・寄付を受けられるようにして、設立・維持の財政基盤の安定を図る」とされた。

以上のように医学博物館設置の承認を受けたものの、医学部同窓会は建設費を負担することとなっていた。そのため2008年11月から翌年1月にかけて、医学部同窓会と大学は建設寄付募集方法に関する協議を進めていた。その矢先、事態が大きく変わった。2009年1月、大学病院は同窓会に対して、博物館の設置場所に予定していた旧外



病院キャンパス旧外来棟（2008年頃）

来病棟を当初の計画どおり取り壊すと通達した。すぐさま医学部同窓会および医学部は、病院に対して取り壊し中止を歎願し話し合いを行ったが、病院の結論は「旧病院施設の取り壊しの前提で必要面積を算定、新病院が建設されている。旧外来棟を残すとなると、この説明ができない。また、既に予算が確定しているので、この変更は不可能である」と動かなかった。文部科学省への概算要求との齟齬が生じてしまえば、新病院建設計画にも支障が出るとの判断だったと思われる。とは言え、旧外来棟を医学博物館へ改修する計画は白紙となってしまった。

計画が頓挫したにもかかわらず、医学部同窓会はすぐに奮起した。2010年7月、国の予算に頼らず同窓会独自の寄付によって博物館を建設し大学に寄付すること、また博物館を大学と共同運営することを新たな目標に掲げたのである¹²。これについて大学との協議が進められ、2011年1月の第1回医系教育博物館推進委員会において、博物館寄贈を大学が承認したことなどが報告されている。同年5月の同推進委員会では、博物館建設場所を医学部75周年記念庭園内に設置すること、名称を「九州大学医学歴史館」とすること、取り壊された解剖学講堂を復元し博物館の建物とすることが決定した。

2012年8月、大学と医学部同窓会との間で「医学歴史館プロジェクトに関する覚書」が締結され、建設寄付事業や運営に関する取り決めがなされた。覚書で重要だったのは、同窓会定款に掲げた「大学との役割分担」の合意に基づき、大学と医学部同窓会とが医学歴史館を共同運営することが双方で確認されたことであった。そして博物館寄付および建設事業は同窓会員の原寛委員長が率いる「九州大学医学歴史館建設実行委員会」が実行していくこととなった。その後の事業の詳細は紙幅の関係で省かざるを得ないが、かくして2015年4月、九州大学医学歴史館が開館した。館内に掲げられた「医学歴史館の記」には「本医学歴史館は新たな温故知新の理念をもって、「歴史に照らしてかいかにかに思うべきかの思索の場」をこれからの学府に提供するもの」とある。この一文には、長らく母校の歴史と向き合ってきた人びとだからこそ気づき得た、母校やそこに所属する人びとへ継承したい本質が込められている。

本稿では、約半世紀にもわたった医学部における史料・史蹟保存運動を概観しながら、2015年に

医学歴史館が開館するまでの経緯を述べた。歴史資料や史蹟の保存、顕彰活動を通じた具体的活動を通じて、卒業生のアイデンティティーと母校の歴史が結びついたからこそ、医学歴史館は完成したと言えよう。

医学歴史館の建設により、医学部や医学部同窓会にとって念願だった史料保存と活用の体制が整備された。また本稿では触れられなかったが、医学研究院長を長とし、医学部教員と同窓会員による運営委員会を設置し管理運営体制を整えたこと、同窓会内に財政措置と実質的な企画運営のできる体制を敷いたこと、また医学歴史館に専任の学芸員職（正確には学術研究員）を置いたことも医学歴史館事業の継続性を担保する点で重要である。他大学には類例のないこのような体制を作りあげたことこそ、九州大学医学部の面目躍如たるところである。

しかし、この間、病院地区における明治期以来の貴重な歴史資料が相次いで散逸したことも事実である。医学歴史館の今後の課題は、残された史料とこれから新たに史料となっていくものをいかに保存しながら、建設に関わった人びとの構想をもとにいかにかに発展していくかであろう。その際、筆者の所属する大学文書館、附属図書館、総合研究博物館など学内の資料保存機関との連携はますます重要になると考える。



医学歴史館と「神の手」

- 1 これらはのちに解剖学講堂の移築や大森通り・宮入通り・稲田通り・田原通り・久保通りなど病院キャンパス内の大きな通りに創設期の教授の名が冠されたことなど概ね実現した。
- 2 「医学部史蹟保存委員会のこと」『九大医報』第36巻第1号、1966年。

- 3 「医学部資料室概要」(1980年11月)。当資料によれば、第一内科は「稲田教授直筆ノート他資料」「ワイル研究室木札」「シーメンス心電計」「カールツァイス顕微鏡」、皮膚科は「ムラージュ」、第一外科は「三宅速先生のノート」「ミクリッチュのデスマスク」、第二外科は「(大森治豊)マント、絹マフラー、キセル」「書画」(後藤七郎教授在籍15年記念に犬養毅が寄贈)、「アルバム」(中山森彦、後藤七郎、友田正信各教授時代)、眼科は「手術器具入戸棚」「眼鏡およびレンズセット」「検査器具セット」「蠟細工標本」「顕微鏡」(いずれも眼科創設以来のもの)、泌尿器科は「膀胱鏡」「尿道鏡」「カテーテル」などをそれぞれ提供している。
- 4 調査成果はのちに、丸山マサ美、Wolfgang Michel、吉田眞一、小宗静男『九州大学医学部標本・資料集：1997年調査』(九州大学大学院医学研究院、2013年(科研費報告書))として刊行された。
- 5 武谷祐之の石碑はもともと東公園にあったが、福岡県庁の移転にともない卒業生の奥村武氏が私費を投じて同所へ移築したとされる。
- 6 古野純典編『九州大学医学部百年史』九州大学医学部創立百周年記念事業後援会、2004年。九州大学医学部百周年記念写真集編集委員会編

『九州大学医学部百周年記念写真集』(九州大学医学部百周年記念写真集編集委員会、2003年。

- 7 委員会設置の理由は「今日まで組織的なまとまり、維持、管理に完全を期したとは言い難く、中には野晒しのまま放置されているものも存在するのが現状です。これらの史料・史跡を一堂にまとめ、整理、維持、管理し、後世のために保存するのは、本学の義務と考えております」とある(2004年11月15日付、水田祥代附属病院長宛原田実根同窓会長「上申書」)。
- 8 医学部長が医学部同窓会長を兼任していた。
- 9 注7の上申書。
- 10 「医学教育博物館の建設へ向けて」『学士鍋』第142号、2007年。
- 11 以下二つの資料引用は、九州大学医学部同窓会史料・史蹟保存委員会編『九州大学医学教育博物館』(仮称)構想』(説明用小冊子、2008年)。
- 12 2010年4月、医学部同窓会は一般社団法人資格を取得した。定款には「大学との協議において合意された当会の役割分担に基づく医学教育、医学研究、大学内行事への支援、大学及び大学周辺環境整備、歴史的建造物・資料の保存、整備等の事業」を掲げ、法人化初の事業として博物館建設事業に着手した。

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	副学長	教授	久保 智之	委員	医 院	准教授	赤星朋比古
委員	文書館	教授	藤岡健太郎	〃	比文院	教授	伊藤 幸司
〃	〃	准教授	赤司 友徳	〃	総 院	教授	渡辺 幸信
〃	人文院	教授	佐伯 弘次	〃	生物環境	教授	吉田 敏
〃	比文院	教授	中野 等	〃	博物館	館長	緒方 一夫
〃	法 院	教授	熊野 直樹	〃	総務部	部長	清廣 哲之
〃	博物館	准教授	三島美佐子	〃	理学部等	事務長	師富 洋
〃	韓 七	教授	永島 広紀	〃	図書館	事務部長	瓜生 照久
〃	総務部総務課	課長	亀井 肇				(2021年1月1日現在)
〃	人環院	教授	蜷川 利彦				
〃	芸工院	教授	藤原 恵洋				

九州大学大学文書館名簿

館 長	副学長	教授	久保 智之	兼任教員	比文院	教授	中野 等
副館長	文書館	教授	藤岡健太郎	〃	法 院	教授	熊野 直樹
専任教員	〃	准教授	赤司 友徳	〃	博物館	准教授	三島美佐子
兼任教員	人文院	教授	佐伯 弘次	〃	韓 七	教授	永島 広紀

協力研究員	九州大学名誉教授	東定 宜昌	事務職員	江藤まゆみ
〃	九州大学名誉教授	植田 信廣	事務補佐員	川畑 由美
〃	長崎大学名誉教授	柴多 一雄	〃	中村 江里
〃	九州大学名誉教授	柴田 篤	〃	大谷 莊平
〃	福岡市博物館館長	有馬 學	〃	江頭 実生
〃	九州大学名誉教授	折田 悦郎	〃	桃嶋 佑太
〃	九州大学名誉教授	後小路雅弘	〃	柴田 敏子
〃	西日本新聞社	大西 直人	〃	有田 陽子
〃	東京大学教養学部准教授	山口 輝臣	〃	立石 聖一
〃	北九州市総務局総務部総務課	市原 猛志	〃	大庭 魁斗
〃	清水建設株式会社 技術研究所	松本 隆史		(2021年1月1日現在)
総務課長 (法人文書資料室長)		亀井 肇		

大学文書館日誌抄録 (2020年1月～2020年12月)

- 1.29 (水) 元九大生協職員、資料調査のため来館 (1月30日、31日、2月3日、4日、5日、6日、7日、10日、12日、13日、17日、18日、19日、20日、21日、25日、26日、27日、3月2日、3日、4日、5日、6日、9日、10日、11日、12日、13日、16日、17日、18日、19日、23日、25日、27日、4月3日、10月23日、26日、11月2日、9日、16日、30日、12月7日、14日、21日も同様)。熊谷憲一氏・九州大学卒業生より資料寄贈。
総務部同窓生・基金課より資料移管。
- 1.30 (木) 大学文書館委員会開催。
大学院人文科学研究院名誉教授、資料調査のため来館 (1月31日、2月4日、5日、7日、10日、12日、14日、25日、27日、28日、3月2日、4日、13日、16日、23日、25日、4月2日、7日、8月6日、9月17日、10月1日、9日、15日、29日、11月5日、19日も同様)。
- 1.31 (金) 文学部卒業生、資料調査のため来館 (2月4日、6日、7日、21日、27日、3月5日、6日、10日、11日、12日、13日、19日、27日、30日、4月2日、3日、10月23日、26日、11月2日、9日、16日、30日、12月7日、14日、21日も同様)。
- 2.5 (水) 学務部学務企画課より資料調査のため来館 (2月6日も同様)。
- 2.7 (金) 元下関市立大学学長、資料調査のため来館 (4月3日も同様)。
早稲田大学教授、資料閲覧のため来館。
九州大学生協生活協同組合より資料寄贈。
- 2.12 (水) 九州大学マンドリンクラブ同窓会より資料調査のため来館 (3月18日も同様)。
- 2.17 (月) 元福岡工業大学教員、資料調査のため来館 (2月21日、27日、4月3日も同様)。
下田守下関市立大学名誉教授来館、資料寄贈 (3月25日も同様)。
矢田俊文名誉教授より資料寄贈 (3月30日、7月2日、9月15日も同様)。
東昇京都府立大学准教授より資料寄贈。
- 2.25 (火) 株式会社SAITOより大学文書館視察のため来館。
- 3.3 (火) 塩川郁夫氏 (元医学部附属病院技官) 来館、資料寄贈。
- 3.5 (木) 福岡女学院資料室より資料調査のため来館 (3月12日、23日、27日も同様)。
- 広島大学助教、資料閲覧のため来館 (10月22日、23日も同様)。
後小路雅弘人文科学研究院教授より資料寄贈 (3月6日も同様)。

- 様)。
- 3.6 (金) 文学部歴史編纂室より資料移管。
文学部より仙厓作品複製品66点、寄託。
- 3.13 (金) 名古屋大学名誉教授、資料閲覧のため来館 (10月23日も同様)。
京都大学教授、資料閲覧のため来館。
- 3.16 (月) NHK記者、取材のため来館 (原爆調査団の件)。
- 3.27 (金) 早稲田大学教授、大学文書館視察のため来館。
- 3.31 (火) 折田悦郎教授、定年退職。
中村江里事務補佐員退任。
『九州大学大学史料叢書』第26輯刊行。
『九州大学大学文書館ニュース』第43号刊行。
- 4.1 (水) 藤岡健太郎、大学文書館の教授及び副館長就任。
赤司友徳、准教授就任。
- 4.3 (金) 元九州大学司書、資料閲覧のため来館。
- 5.12 (火) 「文書記録活動論」(ライブラリーサイエンス専攻)開講 (藤岡教授)。
- 5.13 (水) 「大学とは何かⅠ」(基幹教育総合科目)開講 (藤岡教授)。
- 5.28 (木) 大学文書館委員会開催 (書面回議)。
- 6.25 (木) 九州大学埋蔵文化調査室に資料提供。
- 6.26 (金) 小野寺龍太名誉教授より資料寄贈。
- 7.1 (水) 「大学とは何かⅡ」(基幹教育総合科目)開講 (藤岡教授)。
- 7.6 (月) 統合移転推進部資産活用課より、資料調査のため来館。
- 7.13 (月) 藤岡教授、新任係長・専門職員級研修の一環として「九州大学の歴史について」を講義。
- 7.15 (水) 福岡県立美術館より大学文書館視察のため来館。
大学文書館委員会開催 (書面回議)。
- 8.17 (月) 株式会社エニイクリエイティブに資料提供。
伊藤昌司法学部名誉教授より資料寄贈。
- 8.18 (火) 人事部人事給与課より資料移管。
- 8.26 (水) 九州大学医学部名誉教授、資料閲覧のため来館。
- 8.31 (月) 株式会社オフィス303に資料提供。
- 9.10 (木) 西日本新聞記者、取材のため来館 (利休釜掛の松の件)。
- 9.15 (火) 総務部総務課、総務部地域連携課、農学部事務部、施設部施設課、監査室、財務部決算課、附属図書館図書館企画課、学務部学務企画課より資料移管。
- 9.30 (水) 宮本一夫教授、大学文書館館長退任。
- 10.1 (木) 久保智之副学長・教授、大学文書館館長就任。
中村江里事務補佐員就任。
福岡県立美術館に資料貸出。
農学部附属演習林より資料移管。
- 10.8 (木) I²CNER・Q-PIT共通事務支援室、企画部企画課、財務部経理課より資料移管。
- 10.9 (金) 「九州大学の歴史Ⅰ」(基幹教育総合科目)開講 (赤司准教授)。
「文書記録サービス論」(ライブラリーサイエンス専攻)開講 (藤岡教授)。
- 10.20 (火) 人文社会系事務部、国際部国際課より資料移管。
- 10.21 (水) 工学部事務部より資料移管。
- 10.22 (木) 藤岡教授、新採用職員研修の一環として「九大の歴史に触れる」を講義。
- 10.23 (金) 埼玉大学教授、資料閲覧のため来館。
- 10.26 (月) 元福岡工業大学教員一行、資料調査のため来館 (11月2日、9日、16日、30日、12月7日、14日、21日も同様)。
統合移転推進課より資料閲覧のため来館。
- 10.27 (火) 九州大学アドミッションセンターに資料提供。
- 10.31 (土) 安藤久雄事務補佐員退任。
- 11.1 (日) 有田陽子事務補佐員就任。
- 11.5 (木) 企画部学術研究推進課、統合移転推進部資産活用課、情報システム部企画課より資料移管。
統合移転推進課資産活用係より資料寄贈 (11月6日、10日も同様)。

- 11.6 (金) 筑紫女学園大学講師、資料閲覧のため来館（11月20日、12月16日も同様）。
九州大学経済学部同窓会に資料提供。
- 11.13 (金) 朝日新聞より大学文書館視察のため来館。
- 11.18 (水) 九州大学農学部名誉教授、資料閲覧のため来館。
- 11.19 (木) 筑紫地区事務部より資料移管。
- 11.24 (火) 別府病院事務部より資料移管。
- 11.25 (水) FBS福岡放送に資料提供。
医系事務部、病院地区事務部より資料移管。
梅埜國夫氏来館、資料寄贈。
- 12.3 (木) 人事部人事企画課、学務部基幹教育・共創学部課、総務部環境安全管理課より資料移管。
- 12.4 (金) 「九州大学の歴史Ⅱ」（基幹教育総合科目）開講（藤岡教授）。
- 12.8 (火) 総務部同窓会・基金課より事務文書移管。
山下明子氏より資料寄贈。
- 12.9 (水) 芸術工学部事務部より資料移管。
九州大学総合研究博物館に資料提供。
- 12.10 (木) 中島良一氏より資料寄贈。
- 12.11 (金) 江頭和彦名誉教授より資料寄贈。

九州大学大学文書館ニュース 第44号

発行日 2021年3月31日

編集
発行 九州大学大学文書館

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

Tel:092-642-2292

Kyushu University Archives

印刷 株式会社ミドリ印刷
